

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18555

研究課題名（和文）「教育経済学」の新たなフロンティアを目指して - 国際貿易理論によるアプローチ -

研究課題名（英文）Towards a New Frontier in " Education Economics " -an Approach Based on International Trade Theory-

研究代表者

永田 雅啓 (Nagata, Masahiro)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・名誉教授

研究者番号：50261871

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000 円

研究成果の概要（和文）：高等教育の国際化の分析は、これまで主として教育学者によって行われ、経済学的な枠組みでの理論的・実証的な分析はほとんど行われてこなかった。本研究では、高等教育の国際化の問題を国際経済学的な枠組みで解明することを試みた。

平成30年度は、高等教育の国際化問題の著名な研究者であるEllen Hazelkorn教授を招き、国際シンポジウム「グローバル・ランキングと日本の大学の将来」を開催した。留学生の国際移動のデータは、令和2年以降の新型コロナウイルスの影響を大きく受けたため、留学を代替するオンライン留学や多くの留学に必須なオンラインでの英語学習の効果に関して実証的な分析を試み、その成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高等教育の国際化や大学のグローバル・ランキングの問題の研究に関しては、その多くは教育学の専門家による分析であり、経済学的な枠組みで捉える試みは国際的にも少ない。本研究の成果は、ランキングや高等教育の国際化問題の評価に新たな視点を与えるものである。

すでに日本でもスーパーグローバル大学創成支援事業などで、資金配分の評価項目ないしは目標にグローバル・ランキングが使われるようになってきている。しかし、なし崩しのように実態だけが先行すれば、高等教育そのものを歪めかねない。本研究によって得られた成果は、学術面の貢献に加えて政策面での資料としても貢献するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）： The study on the internationalization of higher education has been conducted so far mainly by pedagogists, and there has been little analysis within the framework of economics. In this research, internationalization of higher education was attempted through the analysis of the international economics framework.

In 2019, we held an international symposium entitled "Global University Rankings and the Future of Japanese Universities", and invited Professor Ellen Hazelkorn, a prominent scholar on the internationalization of higher education as a keynote speaker. The data on the international mobility of students has been greatly affected by COVID-19 since 2020. So, as an alternative analysis, an empirical and quantitative study on the effects of online English learning was conducted, which is essential for many students to study abroad. The research results have already been published as a paper.

研究分野：国際経済学

キーワード：グローバル・ランキング 教育経済学 国際経済学 高等教育 実証分析 オンライン学習

### 1. 研究開始当初の背景

過去10年間に世界の高等教育で起きている顕著な変化は国際化である。知識集約型産業の育成が21世紀の産業政策になるとして、競争力強化のために各国政府が、大学の改革・再編などに多額の資金を投じ、高等教育政策を教育政策の枠組みのみならず、経済政策の枠組みで捉え直している。しかし、こうした現象に対する経済学的な枠組みでの理論的・実証的な分析は、これまでほとんど行われてこなかった。研究代表者は、今日まで国際経済学の枠組みを用いて、現実に行われている多くの問題に対して実証分析を手掛けてきた。本研究では、「国際経済学」の枠組みで高等教育の国際化の問題を捉え直し、「教育経済学」の新たな分野を開拓することを企図している。

### 2. 研究の目的

高等教育の国際化現象の分析は、これまで主として教育学者によって行われ、経済学的な枠組みでの理論的・実証的な分析はほとんど行われてこなかった。本研究では、「国際経済学」の枠組みで高等教育の国際化の問題を捉え直し、実務面、政策面へのインプリケーションを導くことを目的とする。大学グローバル・ランキングに関しては、例えば日本のスーパー・グローバル大学の選定など、今や各国の高等教育行政にも大きな影響を与えるようになってきている。本研究によって得られる成果は、こうした問題に科学的な検証を加え、学術面の貢献に加えて政策面での資料としても大きく貢献するものである。

### 3. 研究の方法

本研究では以下の点を重視した研究方針を進めた。

・経済学ならびに教育学を専門とする学際的メンバーで構成されるチームを組み、実証分析は主に前者が、分析結果の解釈に関しては後者の知見を活用しつつ、両者の分析手法ならびに知見を融合することで、新たな分析視点を獲得。分析結果の評価や解釈に関しては国際セミナーを開催するなどして後者の知見を活用しつつ、両専門分野が協力し合いながら検討する。

・国際共同研究を強く意識した体制を組む。アメリカなどの高等教育の国際化で先行する国と、ドイツなど世界の流れに追いつくのに躍起になっている国があり、異なる状況にある諸外国の研究者との最新情報の交換は極めて有益である。

・社会的な貢献にも重点を置く。大学グローバル・ランキングに対しての日本の状況は、学術的研究が十分でないのみならず、大学関係者や政策担当者を含めた一般的な人々の認識が十分とは言えず、誤解や過大評価も見られる。しかし、世界でも日本でも、グローバル・ランキングの重要性は高まっており、例えば、実務的な意味で少子化が進む中での留学生の獲得（留学生は大学ランキングを一つの指標として大学を選んでいる）、優秀な研究者の獲得などでその影響力は増している。このため、中立的・客観的な立場から、大学グローバル・ランキングに対する正しい認識を広めるなど、学術面での貢献に加えて研究成果の社会的な普及にも力を注ぐ。

### 4. 研究成果

・Hazelkorn, Ellen(2015) *Rankings and the Reshaping of Higher Education: The Battle for World-Class Excellence* 2nd ed., Palgrave Macmillan の邦訳を行った。

本書は、グローバル・ランキングの影響を豊富な国際的研究とデータに基づいて分析した専門書であり、オーストラリア、ドイツ、日本を例にとり、ランキングの社会への影響についても考察している。日本は大学のグローバル・ランキングに関する認識が十分ではなく、誤解や過大評価も多い。しかし、この問題に関して中立的な立場から包括的・学術的に分析した日本の書籍は少ない。そのため、本書を邦訳することは、大学関係者はもちろん、学生や政策担当者、採用する企業関係者などの関係者にグローバル・ランキングの持つ意味を正しく認識してもらい一助となるという意味で社会的意義があると考え、邦訳を行った。邦訳に当たっては、訳だけでなく、その内容の細部にわたり Hazelkorn 教授と何回も意見交換している。

邦訳・出版した書籍は以下の通り。

エレン・ヘイゼルコーン (著), 永田 雅啓, アクセル カーペンシュタイン (共訳) (2018)  
『グローバル・ランキングと高等教育の再構築: 世界クラスの大学をめざす熾烈な競争』学

・ 国際シンポジウム「グローバル・ランキングと日本の大学の将来( Global Rankings and the Future of Japanese Universities )」( 2019 年 1 月、於：上智大学国際会議場 ) の開催。

グローバル・ランキングが世界の大学に与える影響に関する国際シンポジウムを開催した。本シンポジウムでは、グローバル・ランキングと高等教育の国際化問題の著名な研究者である Ellen Hazelkorn 教授( ダブリン工科大学高等教育政策研究ユニット( HEPRU ) 名誉教授兼所長。欧州高等教育協会( The European Higher Education Society ) 会長を歴任。EU、OECD、世界銀行、ユネスコなどの国際機関や各国政府、米国科学アカデミー等に対する高等教育のコンサルタントならびに政策アドバイザー ) を招き、基調講演を行うとともに、専門家( 佐藤邦明( 文部科学省 高等教育局 視学官 )、君和田 卓之( 三井物産株式会社 ヒューマンキャピタル事業室長 )、Hagen Eckert( Technische Universität Dresden ( ドレスデン工科大学 ) Data Analyst )、米澤 彰純( 東北大学国際戦略室 教授 ) ) を交えた講演とパネルディスカッションを行い、議論を深めた。全国の主要大学、研究機関、企業、領事館などから 150 名以上の参加者があり、会場からの質疑応答も含めて活発な討議が行われた。参加希望者が多く、直前に収容人数の大きい会場( 上智大学国際会議場 ) に急遽変更したほどである。アンケートへの回答を見ても非常に好評であり、こうしたテーマでの国際シンポジウムに対する社会的意義の大きさを改めて確認できた。

・ マンツーマン型オンライン英会話学習の学習効果に関する定量的な分析を行った。永田雅啓( 2022 ) 「マンツーマン型オンライン英会話学習が TOEIC スコアに与える効果の定量的分析」 *Reitaku International Journal of Economic Studies*, Vol.29, No.1 「概要」は以下のとおりである。

コロナ禍において、多くの授業が対面からオンラインに切り替わり、その効果についても様々な調査や研究が行われつつある。特に英語を中心に非ネイティブの学生が外国語を学習する分野においては各種の研究がなされてきた。本研究は、麗澤大学で 2020 ~ 2021 年に実施された「オンライン英会話」の効果について、定量的に分析したものである。ここで分析対象とした「オンライン英会話」は、単なる遠隔地からの英語学習ではなく、マンツーマンの英会話学習をニュース教材などの一定の電子教材を用いて行うことに加え、語彙力トレーニング・ソフトを使った一定時間の学習を組み合わせたものである。学習時間や学習場所の選択は学生に任されているが、学習時間についてはすべて、分単位で自動的に記録される。

分析の結果、「オンライン英会話」は、TOEIC スコアを上昇させる統計的に有意な効果があることが実証された。すなわち、TOEIC スコア換算で、Listening で 1 時間当たり 0.52、Reading で 0.35 ( TOEIC のスコアを合計 0.87 ) 上昇させる効果がある。これらを、通常の英語科目と比較すると、1 時間当たり Listening で約 2 倍、Reading で約 1.7 倍、学習効率( TOEIC スコアを上昇させる程度 ) が高い。ただし、「オンライン英会話」では個人による学習時間の幅が大きく「オンライン英会話」と通常の英語教育を組み合わせることで、両者にとって望ましい教育効果を上げることができるだろう。

・ 2022 年度には、高等教育における併願データを用いた大学ランキングの新指標の可能性について定量的な分析を行った。現在、論文として公表準備中である。

永田雅啓「高等教育におけるランキング指標の意味と新指標の可能性 併願データを用いたケーススタディ」 *Reitaku International Journal of Economic Studies* ( 現在、査読が終了し、2023 年度中に掲載予定 )

その「概要」は、以下の通り。

2019 年の米国の教育分野のサービス輸出額は 479 億ドルに達するなど、留学生の流入は、米国を含む主要国において重要なサービス輸出となっている。高等教育は、主要な輸出産業の一つであるだけでなく、世界中から有能な人材を呼び寄せる標識として機能するため、経済的に重要である。世界中から有能な人材を集めるために大学のグローバル・ランキングの役割は、過去 10 年間で急速に増大している。大学を評価する指標としてグローバル・ランキングが使われることを批判する人もいる。しかし、大学のグローバル・ランキングの役割は、債券市場における格付けシステムの役割と似ている。格付け制度が債券を正しく評価していないという批判があっても、投資家が格付け制度を必要とする限り、格付け市場は成長し続けるだろう。同様に、学生や雇用主が大学を評価する共通の尺度を求めている以上、大学ランキング・システムの重要性は今後も高まり続けると思われる。

日本の大学には「偏差値」と呼ばれる日本独自のランキング・システムが採用されている。これは主要なグローバル・ランキングシステムとは大きく異なる方法で算出されている。ただし、これら 2 つの方法に共通しているのは、大学という供給側の特性に基づいてランク付けしていることである。本研究では、需要側、つまり受験生の側から大学を比較してみる。受験生がどの大学に応募し、どの大学に合格し、どの大学に実際に入学するかという行動を分析することで、大学間の相対的な関係を分析することができる。本研究では日本の麗澤大学の事例を用い、2018 年から 2022 年までの複数の出願データを用いて、専攻間の相

対的な競争力を分析した。学生がどの学部・専攻に志願し、実際にどの学部・専攻に入学したかというデータから新たな指標を導入し、各学部や専攻の相対的な競争力を分析することが可能になることを示した。これらの分析を通じて有効な指標や分析手法が見出され、今後、大学全体に関する必要なデータが得られれば、同様の手法を応用して大学間の相対的な競争力を把握することが可能になる。そうすれば受験生の需要側面から大学の新たなランキング指標を作成することが可能となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 永田雅啓	4. 巻 Vol.29, No.1
2. 論文標題 マンツーマン型オンライン英会話学習がTOEICスコアに与える効果の定量的分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Reitaku International Journal of Economic Studies	6. 最初と最後の頁 pp. 12-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永田雅啓	4. 巻 -
2. 論文標題 高等教育におけるランキング指標の意味と新指標の可能性 併願データを用いたケーススタディ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Reitaku International Journal of Economic Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 エレン ハイゼルコーン著（永田 雅啓、アクセル カーペンシュタイン 共訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 434
3. 書名 グローバル・ランキングと高等教育の再構築：世界クラスの大学をめざす熾烈な競争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際シンポジウム「グローバル・ランキングと日本の大学の将来」（2019年1月31日、東京）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	堀江 未来	立命館大学・国際教育推進機構・教授	
	(Horie Miki)		
	(70377761)	(34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 グローバル・ランキングと日本の大学の将来	開催年 2019年～2019年
--------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アイルランド	ダブリン工科大学高等教育政策 研究ユニット(HEPRU)			
ドイツ	DAAD(ドイツ学術交流会)	カッセル大学	ドレスデン工科大学	